

ふるさと探訪

[24]

数日続いた寒さが緩み、
久し振りに澄んだ青空が広
がった。若宮神社がある上
野町の鎮守の森に明るい日
差しが差し込む。境内には
前日まで降った雪が所々に
残る。人影はなく、静寂だ

けが辺りを包み込む。
本殿の右手に九鬼霊社と
一つになった「杵(きね)
の宮」の社が建つ。綾部町

「杵の宮伝説」

鮭の化身が村人に危害

井原西鶴も書物に記す

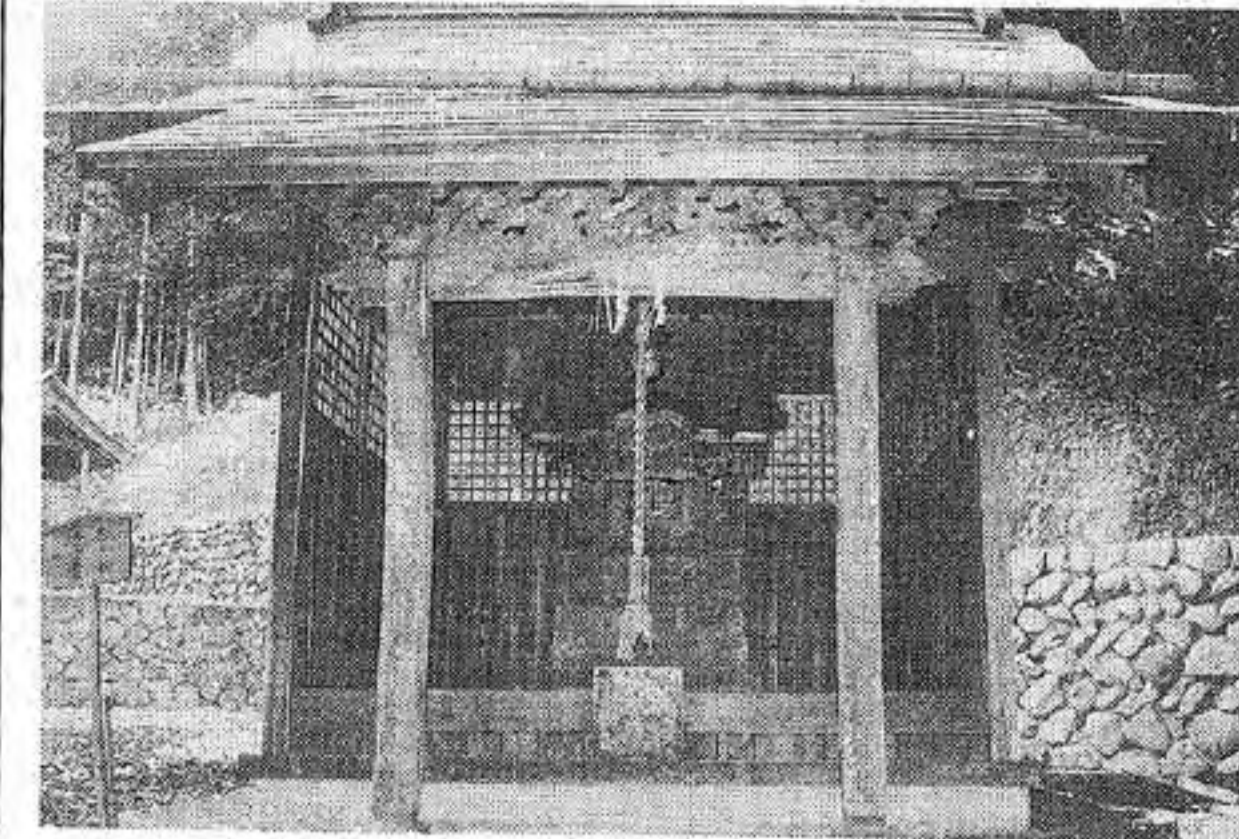
史に書いてあった、江戸時
代の文学者・井原西鶴が書
物で紹介したとされる「杵
の宮伝説」の社である。
同町史によれば、「杵の
宮」の社は、綾部藩主・九
鬼隆季が寛永十一年(一六
三四年)、初めて綾部藩二
万石の領主として移って来

が、仕掛けられたわなに掛
落土の家から、杵の宮の由
来記の写本が見つかった
ら商売物の鮭と雉を取り替
えてしまう。この鮭が「池
の主」となる化け物とな
り、村の娘を人身御供に取
るようになる。
何年か過ぎて再びこの地
を訪れた乾鮭売りは、宿屋
の主人からこのことを知ら
される。男は米をつく杵
(米かち杵)を手に立ち向

さらには江戸時代、すでに
この伝説は相当広く知られ
ていたようで、井原西鶴は
「諸国ばなし」の開巻の序
文の中に、諸国の珍奇な伝
説の一つとして「丹波に一
丈二尺の乾鮭の宮あり」と
記す。これは紛れもない
「杵の宮伝説」を指してい
るといふ。

として……との節がある。
大池からそう遠くない質
山峠(須知山峠)を越えた
天田郡三和町大原には、安
産の神様で知られる大原神
社が鎮座する。昔から綾部
地方の人々とも深いかわり
があったあかしに、同神
社がこの伝説にも登場す
る。

す」と鮭に
限っては手に
触れることさ
え許されない
といった内容
の節がある。
それゆえに
仕掛けたわな
に鮭が掛かっ
ているのに驚
いた村人は困
り果て、思案
のあげく鮭を
池に投げ込み
逃げ帰った。
この鮭が再び
生き返り、村
人や旅人に危
害を及ぼすようになった。
事実、大原神社の氏子た
ちは、鮭や鱒を食べてはな
らないと言いつづけてき
た。こうした風習は全国的
に見られる。人と鮭とは太
古の昔から深いかわりが
あり、様々な伝説を生み出
してきた。



鮭の化身を退治するのに使った杵(米かち杵)を
祭っている社=上野町の若宮神社で

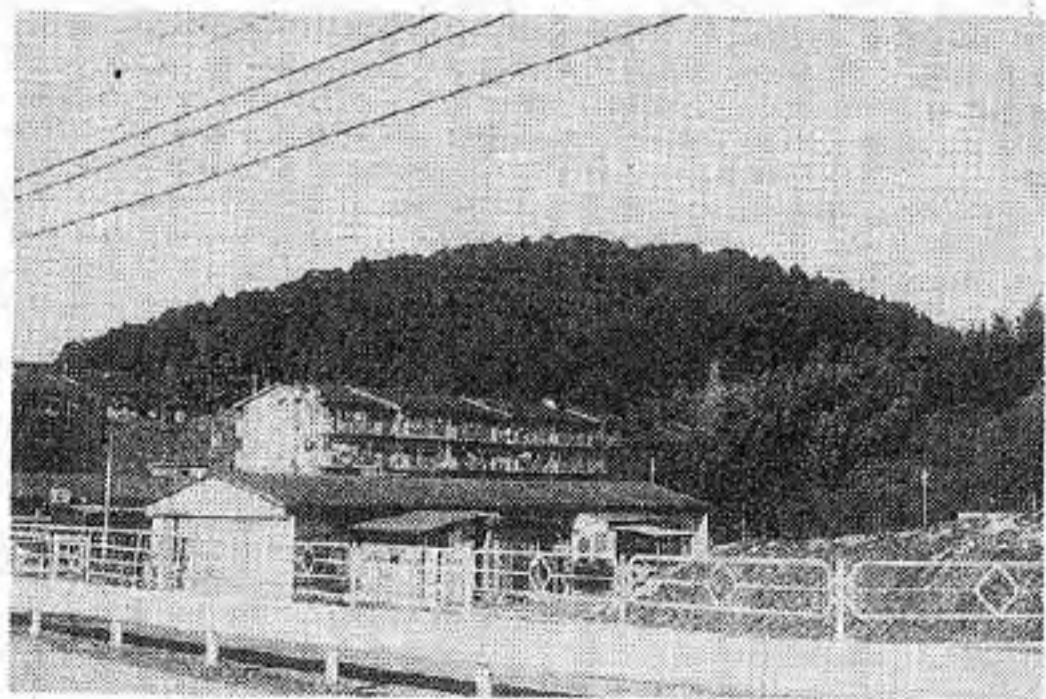
た時、すでに土地の氏神と
して本宮山(本宮町)の中
腹に祭ってあったという。
伝説のあらすじを紹介す
ると……
その昔、綾部坪の内村
(現在の寺町)から本宮山
のふもとにかけた一帯に大
きな池があった。ある日、
京へ向かう舟後の乾鮭(か
らさけ)売りがこの池のほ
とりでひと休みする。

村人は男を神仏のように
敬うが、自分が雉と鮭を取
り替えたとも言えず、感謝
する村人に「退治出来たの
はこの「米かち杵」のおか
げ」と告げて立ち去る。村
人は、この大池を見下ろす
本宮山に杵を納め「杵の
宮」としてお祭りした。

綾部町史は「江戸時代の
途中、綾部に立ち寄ったの
ではないかなと言われて
います。それはともかく

大原天一位大明神の氏子
はもちろんのこと、この近
郷の者に至るまで鱒(ま

寺町の大谷神社にも杵の
宮の社があり、大切に祭
りしてあるという。
(細見)



杵がその昔、祭られていたとい
う
本宮町の本宮山

(細見)